

ボクとワタシの ことば ばなし 第1話

目 次

◆ことばとリズムのお話	・・・・・・・・・・ 2
♪アリエッサッサー♪	・・・・・・・・・・ 2
♪出任せ声でいいじゃない♪	・・・・・・・・・・ 3
◆オノマトペを探検しちゃえ	・・・・・・・・・・ 3
♪「さらさら」と「つやつや」♪	・・・・・・・・・・ 3
♪2音反復語をチェック！♪	・・・・・・・・・・ 4
♪ざっと見「オノマトペ」♪	・・・・・・・・・・ 5
♪ポジティブ vs ネガティブ♪	・・・・・・・・・・ 5
♪幼児語伝説♪	・・・・・・・・・・ 5
♪「いきいき」が一番！♪	・・・・・・・・・・ 6
◆読み書きちよいマジック	・・・・・・・・・・ 6
♪五線紙と音楽記号♪	・・・・・・・・・・ 6
♪ボクたちが本を読むワケ♪	・・・・・・・・・・ 7
◆日本語は二刀流だよ	・・・・・・・・・・ 7
♪日本語は理論が苦手♪	・・・・・・・・・・ 7
♪漢字の力でカバー♪	・・・・・・・・・・ 8
◆明治時代の日本語づくり	・・・・・・・・・・ 9
♪「国語」の始まり♪	・・・・・・・・・・ 9
♪基準にしたことば♪	・・・・・・・・・・ 9
◆明治翻訳語を今ドキ評価だ	・・・・・・・・・・ 10
♪翻訳語を評価しよう！♪	・・・・・・・・・・ 10
♪「時間」は文句なくオールA♪	・・・・・・・・・・ 11
♪やっぱりマズイ「常識」♪	・・・・・・・・・・ 12
♪漢語離れと漢字熟語の役割♪	・・・・・・・・・・ 13

日本語の研究

ボクとワタシの
ことば ばなし

第1話



シンキング・バース

日本語研究班

ボ

クたち日本人にとって、日本語はとても身近なことばです。毎日の暮らしの中で、人のお話を聞いたり、人にお話をしたり、文章を読んだり、書いたりしています。いろいろなことを考える時も、ボクたちの頭の中では、無意識の日本語がぐるぐる回っています。ボクたちはいつも、ことばで考え、ことばで何かを判断しているのです。



ことばって、何だろう。日本語って、どんなことばなんだろう。そんな興味を持ったことはありませんか？

ここで話すのは、そんな興味を持った人に、ちょっと役立てばいいな、というお話です。でも、日本語の「話し方教室」や「綴り方教室」ではありません。「正しい日本語」とか「立派な日本語」、知らない単語や使い方を学ぶ教室でもありません。ことばって楽しいし、おもしろいけど、怖いところもある。そんなことばの力について、考えるきっかけになればと思っています。

ことばと
リズムのお話

歌

ったり、踊ったり、楽しい時間を過ごすことが、人はとても好きです。大勢で歌や踊りを楽しんでいるのを見てるだけでも、ウキウキした気持ちになって来ます。人はそんな時、《意味》を超えちゃうことばを発したりします。何ていうか、《意味》なんて、どうでも良いのです。

例えば、お祭りでお神輿を担ぐ時、みんな「ワッショイ、ワッショイ」と掛け声

をかけます。「ワッショイの意味は？」なんて、いちいち考えません。「ワッショイ」の《意味》は、たぶん「わ=私、しょう=担ぐ」から来ているのでしょうか。でも、そんな《意味》を熟考しながら「ワッショイ」しても、おもしろくもなんともありません。景気づけの掛け声ですから、「ワッショイ、ワッショイ」は、やっぱり「ワッショイ、ワッショイ」のまんまで良いのです。

♪アリエッサーサー♪

フ

ランスの思想家に、ルソーという人がいて、ことばは歌や詩から始まったのではないかと、言っていました。詩というのは、

ボクとワタシの ことば ばなし

ポエムです。ポエムなんて、ちょっとオシャレに聞こえます。「モノは言いよう」って言いますが、ルソーさんはたぶん、ことばの始まりに、お化粧をしてあげたかったのでしょうか。優しい人だったんだろうなあ、と思ったりします。ワタシは、生まれたてのことばが、オシャレなポエムじゃなかったとしても、《意味》は後からついて来た、という考え方には賛成です。

みなさんは、日本の民謡を聴いたことがありますか？ ほとんど聴かないという人も、たまに聴いてみてください。おもしろいことばが、満載ですよ。

日本の民謡には、歌の合間に「合いの手」と呼ばれる掛け声が入る歌が、たくさんあります。バックコーラスですね。外国の歌でも、「アー」とか「ウー」とか「ワオウワオウ」のような、バックコーラスが入ることは、良くあります。ところが、日本の民謡の「合いの手」は、そんな単純なものではありません。「アリアアリアアリアサッ」とか、「ヨイヨイヨイノヨイヨイヨイ」とか、「コリャチョイナチョイナ」とか、吹き出しちゃうようなことばが入ります。

「何なの？ これ」と、思います。

ハアキタコラサッサ
ザラントショ
ヤサホラエー
ヨイヤサノサッサ
サッコラチョイワヤッセー

♪ 出任せ声でいいじゃない ♪

こ

とばの成り立ちを研究している人は、そのことばがどこから来て、どんな《意味》があるのかを調べようとするかもしれません。でも、ワタシは、《意味》なんてどうでも良いじゃない、と思っちゃいます。

ことばは、伝えたいことがあって、それを言い表すために作られた、と考えている人はたくさんいます。ワタシは、その意見には半分賛成、半分反対です。だって、お祭り騒ぎで、何だかわかんないけど叫んじゃった声って、誰かに何かを伝えるためのものなんですか？ 「ウオウウオウ」でも「スッチャカ」でも良いけど、《意味》なんてどうでもいい声ですよ。

そういう声は、楽しいから出た声です。気持ちがハイになった時の、出任せ声です。気持ちの表現声です。野獣に襲われたような時の声は、「ギャー」とか「ウオー」とかでしょうが、楽しい時の声は単純ではありません。「アリアエッサッサー」になっちゃうのです。

ここで取り上げたことばは、音の響きやリズムが大切にされていて、《意味》は二の次です。「《意味》のないことばなんて、ことばじゃない」という人が、いるかもしれませんね。でも、ワタシは、ことばはリズム、ことばは音楽、という考え方には大賛成です。

オノマトペを
探検しちゃえ

♪ 「さらさら」と「つやつや」 ♪

テ

レビのシャンプーや化粧品のコマーシャルでおなじみのことばに、「さらさら」や「つやつや」があります。「ふわふわ」とか「ポカポカ」とか「ワクワク」とか、女性向けの商品のコマーシャルには、二つの音を組み合わせて繰り返すことばが、なぜか良く登場します。とてもわかりやすいし、リズムがしっくり来ることばが数多く

ボクとワタシの ことば ばなし

あります。難しい漢字ことばで説明されるより、感覚的になじみやすいですね。とても便利な日本語と言って良いでしょう。

「さらさら」や「つやつや」のようなことばを、ワタシたちは、「オノマトペ」と呼んでいます。「オノマトペ」には、大きく分けて、「ワーワー」「ギーギー」「トントン」「シューシュー」のように音を真似たことばと、「そわそわ」「キラキラ」「ゆらゆら」「てくてく」のように様子を表すことばがあります。音を真似たことばを「擬音語」、様子を表すことばを「擬態語」と、ワタシたちは呼んでいます。日本語は、「オノマトペ」がとても豊富な言語と言われています。

日本語「オノマトペ」には、2音反復語のほかに、「ソット」「ゾット」「ホット」のように「っ（促音）」がつくことばと、「グンと」「ドンと」「ポンと」のように「ん（發音）」がつくことばがあります。そのほかに、「コケコッコー」「どっこいしょ」のように、法則漏れのことばもいくつかあります。その中で一番多いのが、「さらさら」「つ

やつや」系の2音反復語です。

♪ 2音反復語をチェック！ ♪



タシたちは、日本語「オノマトペ」に、2音反復語がどれくらいあるのか調べることにしました。

調べ方は、「あ」から「ん」までの五十音、「が」「ざ」「だ」系の濁音、「ぱ行」の半濁音、「しゃ」「にゃ」「ひゃ」のような拗音をタテ列（全102音）に並べ、ヨコ行には、それに「っ（促音）」と「ー（長音）」を加えた全104音を並べました。その全部の組み合わせを作ると、1万608通りの組み合わせができます。「りやみよりやみよ」や「れどれど」のように、日本語にならない組み合わせもできますが、《意味》は無視しました。

その中から、日本語として《意味》が通じる組み合わせを選びました。その結果、約1,400組が、日本語の単語になることがわかりました。擬音語が約300語、擬態語が1,000語ちょっとでした。選んだ基準が

●日本語オノマトペの音による組み合わせ表（抜粋）●

	い (4)	う (5)	き	ら (2)	り (3)	れ	ろ	わ	ん (1)
あ	あいあい	—	あきあき	あらあら	ありあり	あれあれ	—	あわあわ	あんあん
う	—	—	うきうき	うらうら	うりうり	—	うろうろ	—	うんうん
く (3)	くいくい	くうくう	くきくき	くらくら	くりくり	くれくれ	くろくろ	—	くんくん
ぐ (1)	ぐいぐい	ぐうぐう	ぐきぐき	ぐらぐら	ぐりぐり	くれぐれ	—	ぐわぐわ	ぐんぐん
ご (3)	—	ごうごう	ごきごき	—	ごりごり	—	ごろごろ	ごわごわ	ごんごん
す	すいすい	すうすう	すきすき	すらすら	—	すれすれ	—	—	すんすん
ず	ずいずい	ずうずう	ずきずき	ずらずら	ずりずり	ずれずれ	—	—	ずんずん
ど	—	どうどう	どきどき	どらどら	—	どれどれ	どろどろ	どわどわ	どんどん
は	はいはい	—	はきはき	はらはら	—	はればれ	—	—	—
ぼ	ぼいぼい	ぼうぼう	ぼきぼき	—	ぼりぼり	—	ぼろぼろ	ぼわぼわ	ぼんぼん
む	—	むうむう	むきむき	むらむら	むりむり	むれむれ	—	むわむわ	むんむん
も (2)	—	もうもう	（や）きもき	—	もりもり	もれもれ	もろもろ	もわもわ	もんもん
わ (3)	わいわい	わうわう	わきわき	わらわら	わりわり	（われわれ）	—	—	わんわん

注）ピンクはポジティブ語、青はネガティブ語、無着色は未判別を示す。「—」は未抽出の組み合わせ。行列の黄色と各番号は、頭音・尾音で使用頻度の多い順を示す（長音を除く）。

ボクとワタシの ことば ばなし

共通語と古語、ワタシたちが知っている範囲の現代語や「地域のことば」なので、抽出漏れがあるかもしれません。

♪ざっと見「オノマトペ」♪

複

数の用法を持つ「オノマトペ」が、いくつもあります。「ワンワン」は、犬の鳴き声や犬そのものを指しますが、「ワンワン泣く」と言うと、犬とは関係のない使い方になります。犬の「ワンワン」は擬音語用法、「ワンワン泣く」は擬態語用法です。「カンカン」も、鐘の音を指す擬音語用法がある一方で、「カンカン照り」のように、お天気を指す擬態語用法があります。昔は、「カンカン踊り」という名詞もありました。この「カンカン」は、いったい何だったのじゃ！

また、「はいはい」「ないない」のような幼児語もあれば、「せいせい」「ぐさぐさ」のように、使う相手によっては禁句になることばもあります。

♪ポジティブ vs ネガティブ♪

そ

んな日本語「オノマトペ」を、ワタシたちは、ポジティブとネガティブに二分しました。

予想通り、ネガティブな「オノマトペ」が、圧倒的に多くなりました。使い方で微かなポジションにいることばも、もちろんあります。それでも、ネガティブ語の多さにはビックリです。

■暗いイメージを表すことば

「くよくよ」「ねちねち」「ぼろぼろ」「くたくた」「もんもん」など多数。自称と他称あり。

■悪い印象を表すことば

「ぐでぐで」「でぶでぶ」「べらべら」など主に他称表現。

■下品な印象を与えることば

「ぎゃはぎゃは」などのいわゆる「お下劣語」。無意識に使われることが多い。

このほか、「むちむち」「やばやば」などもワタシ的にはネガティブです。

では、ポジティブな「オノマトペ」には、どんなことばがあるのでしょうか。

■力強さを表すことば

「ぐんぐん」「どんどん」「めきめき」「もりもり」「ハキハキ」「ぐいぐい」など、やや男性的色合いが強い。

■楽しさを表すことば

「うきうき」「わいわい」「わくわく」が代表。「はらはら」「ドキドキ」は使う場面によって微妙。

■能力の高さを表すことば

「すいすい」「すらすら」「するする」のように「す列」に際立つ。

■爽やかさを表すことば

「さやさや」「さらさら」「すくすく」「すやすや」「そよそよ」「つやつや」など主に「さ行」に目立つ。

■美しさや可愛らしさを表すことば

「ピカピカ」「キラキラ」「ふかふか」「ピョンピョン」など。

♪幼児語伝説♪

日

本語「オノマトペ」のもうひとつの特徴は、幼児語です。

「ワンワン」「ニャンニャン」「チュンチュン」やお腹の「ぼんぼん」のような名詞表現、褒めることを「なでなで」と言う動詞表現、「ムニャムニャ」「もによもによ」「ニョロニョロ」のような形容詞表現と多彩です。

そんな多彩な幼児語オノマトペは、「ポニョポニョ」のように、良くも悪くも大人ことばに入り込んでいます。「ジュージュ

ー（炒める）」のように、大人ことばとしてすっかり定着したものもあります。

この傾向を嘆かわしいと見るか、好ましいと見るかは、人それぞれです。ことばから精神年齢を判断して、「退嬰化（幼児化）」していると言う人もいます。ワタシ的には程度問題でしょうね。良い年して「お肌ちゅるちゅる」とか言われたら、やっぱり引きますよねー。

♪「いきいき」が一番！♪

ワ

タシが一番好きな日本語「オノマトペ」は、誰が何と言おうと「いきいき」です。「生き生き」「活き活き」のようにも書きますが、これを置いてナンバーワンなんて、あり得ません！

日本語「オノマトペ」は、残念ながら、多くの欠点も抱えています。主観的で、自分本位の感覚言語で、これといった尺度もありません。「私の髪、さらさらでしょ？」は自慢。「あなたの髪、さらさらね」は褒めことば。「さらさらでしょ？」に、「そうお？」と反応されたら、ことばに詰まります。「1」は「1」のような、確定した《意味》が、「オノマトペ」にはないのです。

「いきいき」をナンバーワンに選んだワタシの選考基準は、主観的で、感覚的で、これといった尺度もありません。好きなオノマトペ・アンケートをした結果でもないのです、客観性もありません。要するにワタシの好みです。

でも、ワタシは、ネガティブ語が圧倒的に多い日本語「オノマトペ」の中で、ひときわ輝く「いきいき」が、やっぱり好きです。一つのことばには、いろんな《意味》があります。「いきいき」は、変な《意味》をくっつける人がめったにいない、ステキなことばです。

読み書き

ちよいマジック



普

段の生活で、いつも身の回りに音楽がある人は、たくさんいます。音楽には、リズムとメロディーがあって、ノリノリだったり、シンミリしながら、ボクたちはそれを聴いています。

ボクたちは学校で、音楽には楽譜があることを習いました。五線紙に音符や休符が書いてあり、「ドレミファソラシド」が、どの場所の音なのかを教わりました。音符や休符は記号で、音ではありません。「ド」の位置の「♪」は、「ド」と音階をつけて音にしなければ、「ド」にはなりません。なのに、音楽の先生は、その楽譜を見て、時々紙をめくったりしながら、あっさりピアノを弾いていました。

これって、何なんでしょう。

♪五線紙と音楽記号♪

ボ

クは、音楽を専門に勉強してないので、楽譜を見て歌ったり、楽器を演奏したりできません。だから、それができる人は、すごいと思います。「楽譜が読める」ということばがあります。見ただけで、メロディーとリズムが、自然に出て来るんでしょう。

ボク的には、それが文字のスゴさだと思います。突然頭に浮かんだメロディーを、忘れないように楽譜にお落とししたり、その曲を誰かに歌わせてみたり、そんなことは、五線紙と音楽記号があって初めて、できることなのです。

音楽は、ボクたちの暮らしに元気をくれます。その音楽は、五線紙と音楽記号のお

かげで、発展して来ました。もちろん、日本民謡やアメリカのフリースジャズ、世界の民族音楽のように、楽譜がない音楽は、たくさんあります。でも、西洋音楽の楽譜を発明した人って、やっぱりすごい。そう思うってしまうのは、ボクだけでしょうか。

♪ボクたちが本を読むワケ♪

夏

休みの図書館。受験勉強や自由研究をしていて、「こんなに本がいっぱいあるのは、どうしてだろう？」って思ったりしたこと、ありませんか？

図書館の本を全部読むなんて、ぜったい無理なのに、書架いっぱいの本が並んでいます。その数の多さには、ビックリです。

街角のカフェや陽当りの良いラウンジ。静かに読書している人がいました。「どうしてあの人は、本を読んでもらうだろう？」「何を読んでもらうだろう？」って思ったこと、ありませんか？

不思議ですね。どうして人は、文字を読んだり、書いたりしたがるんでしょう。

人は、物事を考える時、言語で考える動物と言われています。たいていの日本人は、日本語で物事を考えていることになります。もちろん、ミュージシャンが音で楽曲を考えたり、デザイナーやスポーツ選手が、イメージで作品や動き方を考えたりすることは、あるでしょう。そういう人も、普段の生活時間は、日常語の世界にいます。

考えることには、声や形がありません。ひとり言をブツブツ言う人はいますが、たいていの場合は、頭の中だけで物事を考えます。その時のボクたちの頭の中は、日本語だらけです。キチンと整理されてない、ごちゃごちゃ状態の時もあります。放っておいたら、こんがらがって、「考えるの、止めた！」です。

そんな時は、紙とペンを出して、文字にして頭の中を整理しようと思います。最近、スマホでツイートとか、ブログにアップも、ありですね。いずれにしても、頭の中ごちゃごちゃ状態の日本語を、文字にして何とか整理したいのです。

図書館の書架いっぱいに並んだ本は、人の頭の中のごちゃごちゃを、とりあえず整理して本にした人たちの数が、あんなにたくさんいた結果だとボクは思います。

そんな本の中から、ボクたちは、一冊を選んで読み始めます。たぶんその動機は、「知りたい」です。好奇心ですね。カフェやラウンジで静かに読書している人は、文字が伝えてくれる何かで、自分の好奇心を満たそうとしているのでしょうね。

日本語は 二刀流だよ



日

本語の文字には、「ひらがな」「カタカナ」「漢字」があります。それに、数字と記号、アルファベットも使います。

漢字とアルファベットは、日本人にとって外来字です。「ひらがな」と「カタカナ」だけが、基本的には日本固有の文字です。ここで問題です。

日本人は、「ひらがな」「カタカナ」を持ってるのに、どうして漢字やアルファベットを使って、日本語文を作るのでしょうか。

♪日本語は理論が苦手♪

ワ

タシ姉さんが、日本語「オノマトペ」のところで話したように、日本語の「ひらがなことば」

「カタカナことば」は、感覚的で、尺度がないことばが多いのです。感覚表現や情緒表現には優れていますが、その分、理論が苦手です。それは、日本語文字の世界でも同じです。

ボクたちは、毎日の暮らしを感覚だけで生きて行くことはできません。客観的に物事を見たり、具体的に出来事や事実を説明しようとする時、感覚表現だけでは困ります。例えばお布団の「ふわふわ」が、どれくらい「ふわふわ」なのかは、感覚任せです。ある人にとっては「ふわふわ」でも、別の人にとっては「ふわふわ」ではないかもしれません。どの程度「ふわふわ」なのかは、目安が必要です。

学校を「卒業」と言いたい時に、「卒業」に代って、「学び舎（まなびや）とのお別れ」と言ったとします。聞いた人は、「閉校になるの?」「校舎壊しちゃうの?」「転校するの?」と、バラバラの解釈をする可能性があります。これでは、ことばの役割を果たしません。

つまり、「ひらがなことば」「カタカナことば」の表現能力には、限界があるのです。この限界を超えるためには、どうしても漢字が必要でした。

♪漢字の力でカバー♪

お 布団の「ふわふわ」がどれくらいかを知るためには、機械で測って、数値化にするのが一番です。その数値を「ふわふわ度」と呼んで、数値の大小を比較すれば、「ふわひわ」のちがいは一目瞭然です。「度」を加えただけで、感覚だけのことばは、論理的になりました。それが、漢字の力です。

「卒業」は、学校以外に使われるケースもありますが、少なくとも「閉校」とか「校舎を壊す」と思う人はいません。《意味》

■漢語とひらがな語

漢字が日本列島に伝わったのは、ずいぶん昔です。卑弥呼（ひみこ）の時代には、漢字の読み書きができる人が、すでにいました。でも、それは、ほんのひと握りの人でした。

平安時代になると、漢字を崩して「ひらがな」「カタカナ」が作られました。「ひらがな」は、京の宮廷の女官たち、「カタカナ」は、お寺の僧侶たちが発明したと言われています。

「ひらがな」は、女性を中心に和歌や随筆、物語を綴る文字として発展しました。典型的な女性文字です。近畿地方で発達したことから、「大和ことば」「大和文（ぶみ）」と呼ばれます。

「カタカナ」は、お経や漢文を読み下すことから始まり、男性を中心に広まりました。江戸時代の幕府や藩、明治時代のお役所でも、「カタカナ」は重要な役割を果たしていました。現代日本語の「ひらがな」部分は、「カタカナ」表記されていました。

日本の「書きことば」は、「ひらがな語（女性語）」と「漢文+カタカナ語（男性語）」の二つの流れで、発達して来たのです。

明治時代になると、本格的な「日本語」づくりが始まります。漢語は元々、武士や商人、僧侶などしか縁がないことばでした。庶民が聞いても意味は分からず、武士階級の女性でさえ「ひらがな語」が中心でした。

漢語は基本的に、男性中心の「仕事ことば」です。それに対して「ひらがな」は、女性中心の「噂ことば」です。戦後になって「ひらがな文」が公式文になりますが、男女間のことばギャップは残りました。

(by ボク)

が、ブレないからです。このブレの少なさも、漢字の力です。

ところが、漢字はその数が膨大です。日本語の「常用漢字」は、2,000字近くあります。さらに、「山」「川」のような一文字表現はまれで、熟語表現が圧倒的に多いのです。熟語の数は、1万をはるかに超えるそうです。

この漢字問題は、現代日本語の一つの課題です。情報が氾濫して、やたらにたくさんのことが伝えられる時代を迎え、環境対応も求められています。簡単な日本語を求める声がある一方で、淡泊な日本語が増えると心配する声もあります。どちらに偏っても、「説明不足」の原因になったり、「クドくて難解」の原因になったりします。

明治時代の 日本語づくり



言

語としての「日本語」は、明治時代に始まりました。その歴史は、まだ150年くらいです。

「え？ 『源氏物語』や『枕草子』は、日本語じゃないの？」と、言う人もいるでしょうね。

確かに『源氏物語』や『枕草子』は、「日本語」につながる重要な要素です。でも、ボクたちは、そのことばを「日本語」とは呼びません。「日本語」という名称は、江戸時代以前には、ほとんど使われなかったのです。

武蔵や越後、大和や長門のように、68の「国」に分かれていた江戸時代以前の日本では、『源氏物語』のことばは、一つの「お国ことば」でした。今で言う「方言」です。

「大和ことば」と呼ばれています。「大和」の勢力が強かったので、一番力の強い「方言」だったことは確かです。中国王朝と交易していたため、「倭語」と呼ばれることもあります。でも、それは、日本中で通用する統一言語ではありませんでした。

それぞれの「国」には、「お国ことば」がありました。今でも日本の各地のことばが残っているように、日本の「話しことば」は、地域に応じて、とてもバラエティーに富んだものでした。

♪「国語」の始まり♪

明

治時代は、ヨーロッパ諸国やアメリカとの新しい国際関係を通して、新しい「日本」を築いて行く時代でした。それは、日本列島にあった「国」を一つにし、「日本」として船出して行く時代の始まりでした。

市民革命を経験したヨーロッパの国々では、「国民」の結束を強めるため、言語を統一して子供たちに教育する仕組みを作っていました。学校です。どこの国にも「地域のことば」はあって、離れた地域同士では、ことばが通じ合わないことがありました。そのため、政府が「国語」を定め、それを子供たちに教えていたのです。日本の「国語」、つまり「日本語」は、ヨーロッパの国々の方法を模範に始まりました。

♪基準にしたことば♪

イ

ギリス英語やフランス語は、どんなことばを基準に「国語」を作ったのでしょうか。大勢の人に使われていたことばが、基準になったのでしょうか？

言語学者のスーザン・ロメインは、イギリス英語の場合は、中期英語の東部ミッドランドのことばを基準にしたと言ってい

ます。ロンドンやオクスフォード、ケンブリッジなどが近くにありますが、英語の「変種」なのだそうです。フランス語の場合は、基準のパリ語を国の機関が審査して「国語」を作りました。どちらも、多数派ではないことばです。

日本語の場合は、東京の士族が使っていたことばを、基準にすることにしました。「山手ことば」と呼ばれていました。庶民が使う「江戸ことば」や各地のことばとはちがう少数派ことばです。参勤交代で江戸に集まった武士たちが、使っていたことばと言われています。

「言文一致」などいくつもの悪戦苦闘はありましたが、教科書に書かれた文字を通して、「日本語」は、子供たちに普及して行きました。明治時代の末には、小学校の就学率が90%を超え、文字レベルの「日本語」は、かなり浸透しました。全国共通の「日本語」は、文字から始まったのです。

大正時代になると、子供たちは、歌を通して「日本語」を覚えるようになりました。『赤い鳥』のような雑誌が出版されて、童謡が掲載されました。今でも親しまれている歌が、いっぱいあります。音楽から身についたことばは、ワタシお姉さんも言っているように、なかなか忘れません。

明治翻訳語を 今ドキ評価だ



ヨ

ヨーロッパの国々とのお付き合いに船出した日本は、いろんなことばに出会うことになりました。江戸時代には蘭学があって、一応オランダ語の勉強はしていました。

でも、明治時代に一気に増えた外国語は、英語、フランス語、ロシア語、ドイツ語などなどです。エライこっちゃになって当然でした。

オランダ語の翻訳は、江戸時代からすでに行われていました。それは、蘭学＝医学というイメージどおり、医者を中心に進められました。杉田玄白の『解体新書』の頃から、「胃腸」「神経」のような医学用語があったそうです。宇田川榕菴は、「酸素」「炭素」といった元素も翻訳しました。

ところが、明治時代に会った外国語は、それどころじゃなかったのです。政治、経済、産業、暮らしと、何から何までです。特に新政府を担う人々にとっては、何のこっちゃばかりだったことでしょう。早わかりは必須でした。翻訳は急務でした。

目に見える物だったり、日本人にも理解できる事柄や名称の翻訳は、それほど問題はありません。英語の“I”“you”を「ボク」「キミ(たち)」，“mountain” “river”を「山」「川」、”table”を「机」に置き換えれば済むことです。

問題は、日本人にはなかった考え方とか、日本人にはなかった習慣とか、制度や知識に関することばなどの翻訳でした。

♪翻訳語を評価しよう！♪

例

えば、“state”，“nation”，“country”には、それぞれ「国」という意味があります。それまでの日本人の意識では、「国」

と言えば「藩領」「地方」「生まれ故郷」に近い意味でした。“country”が最も近いのでしょうか。ところが、“state”，“nation”は、より大きな「国」、江戸時代的用法では「天下(日ノ本)」を指すことばです。「国」を「天下」の意味にするためには、意味のすり替えが必要なのです。「すり替えまし

た」で済めば良いけど、ことばの習慣は、そんなに簡単にすり変わる訳ありません。「国」は、使えるようで使えないことばだったのです。

そこで、福沢諭吉は、“state”を「国家」と翻訳しました。「国が集まった家」みたいな感覚だったのでしょうか。“nation”は、“state”より民族性が強いことばです。「国家」は、どちらかというと“nation”に近いニュアンスです。でも、新しいことばを作ったは良いけれど、「国家」という日本語は、“state”と“nation”のちがいを、十分に翻訳し切れてはいないのです。

一つのことばの例を見ても、このようなギャップがある明治時代の翻訳語は、「問題あり」のことばがかなりあります。使われなくなったことばはともかく、今も広く使われていることばは、評価が必要とボクたちは考えました。当時の翻訳者たちの悪戦苦闘は賞賛しますが、外国語との意味ギャップだけでなく、漢語本来の意味を失ったことばを広めたことも事実です。

ボクたちは、翻訳語の大半を占める漢字二字熟語の翻訳語を、どこから出たことばかによって4種類に分類した上で、4つの評価項目で5段階(A～E)評価しました。

分類と評価項目は、次のようにしました。

【翻訳語の出所】

■中国（当時の清国）の翻訳語

『万国公法』のような中国本、中国語翻訳辞書などから拾った翻訳語

■古典からの借用語Ⅰ

日本の翻訳者が、中国古典や仏教經典から拾い、元々の漢語も意味に近い翻訳語

■古典からの借用語Ⅱ

日本の翻訳者が、中国古典や仏教經典から拾い、読み方や意味を変えた翻訳語

■日本人の造語

日本の翻訳者が、新しく作った造語による翻訳語

【翻訳語の評価項目】

■同義性

原語の意味にぴったりか

■浸透性

現代語でも広く使われているか

■機能性

使いやすいことばか

■語感

現代語的語感は優れているか

♪「時間」は文句なくオールA♪

調査の結果、全評価項目で「A」になったのは、次の単語でした。

■中国（当時の清国）由来の翻訳語

- ・宇宙(cosmos) 古代中国や古代ギリシャからある概念。洋の東西を問わず、普遍性を表す。
- ・歴史(history) 同意性は高いが、「歴史」は国家主観（手前味噌）的。“history”が持つ見聞性や民衆性には劣る。

■中国古典などからの借用語Ⅰ

- ・為替(exchange) 日本の古語。意味に微妙なちがいがあがるが、翻訳語として適正。“exchange”の方が意味変化した。

■日本人の造語

- ・時間(time/hour) 西周の造語。英語の二義を備えた名訳。文句なしのオールA。“time”に対応する「時刻」がある。

■原典の特定が難しい語

- ・機械(machine) 中村正直の訳出語らしい。機能性と浸透性は抜群。漢字の画数が多いのがやや難点。
- ・技術(technique) 西周の訳出語。全ての面で優れているが、「テクニック」「テクノロジー」に押され気味。

♪やっぱりマズイ「常識」♪

一方、全評価項目で「E」になった単語はゼロでした。しかし、「同義性」で問題がある単語は、相当あります。同じ「E」評価でも、定着していて今さらどうにもならない単語は「E」、定着していても問題ありの単語は「E'」に分類しました。

「E」には、「内閣」「経済」などがあります。「情報」は「E'」評価ストレスです。

「E'」評価の中で、特に問題が大きいのは、次の単語でした。

- ・個人(individual) 福沢諭吉、中村正直らが翻訳に苦慮した。最も問題なのは、「一人の人は独立した権利を持つ」というニュアンスが、「個人」にはないこと。

そのため、日本語の「個人」と「人権」は、別物扱いになってしまう。

- ・常識(common sense) 福沢諭吉の訳だが、“common (共有の)”、“sense (感覚)”の訳になっていない。そのため、単なる私的見解を、さも共有感があるかのように「常識でしょ」と使ったり、一部の人の「常識」を基準にして「常識ないね」と、差別的表現に使ったりする。
- ・進化(evolution) 井上哲次郎の初訳とされる。「進化」は、直線的な「発展」「前進」のイメージなのに対し、“evolution”は「展開」「回転」のイメージが根底にある。『進化論』は『展開論』が正しい。
- ・意識(consciousness) 仏教用語で私的認

●明治時代の翻訳語評価 1 (抜粋) ●

翻訳語	英 語	評 価				別読み (別語)	原典	備 考
		同義性	機能性	浸透性	語 感			
■中国の翻訳語								
宇宙	cosmos	A	A	A	A		中	本文参照
法律	law	A	B	A	C		中	『万国公法』
権利	right	D	D	B	D		中	『万国公法』
政党	political party	C	C	B	D		中	
内閣	cabinet	E	B	A	C		中	中国辞書
家族	family	B	B	A	B		中	
精神	sprit	C	C	A	B	(きもち)	中	原義「精霊」
■古典からの借用語 I								
生命	life	D	C	A	B	(いのち)	中	英「人生」
人間	human being	C	A	A	A	じんかん	仏	
世界	world	C	A	A	A		仏	
歴史	history	A	A	A	A		中	本文参照
言語	language	C	C	C	C	ごんご (ことば)	中	英 “word”
観念	idea	B	C	D	D	(想念)	仏	本来の “idea”
方法	method	B	A	A	A		中	
習慣	habit	E	B	A	D	(くせ)	中	「悪癖」に転化
流行	fashion／mode	D	A	A	B	はやり (inference)	中	
市場	market	A	B	B	A	いちば	中	
為替	exchange	A	A	A	A		和	本文参照
【評価基準】 A:極めて高い(極めて良い) B:高い(良い) C:普通 D:低い(悪い) E:極めて低い(極めて悪い)					【原典】 中：中国文書（古典、辞書等） 仏：仏典 和：日本由来			

識を表す。“consciousness”が「共通認識」を指すのとは、真逆のベクトルになる。結果的に「意識過剰」のような、仏典的な意味が薄い使われ方をする。

- ・象徴(symbol) 中江兆民の造語。問題語の一つとされながら、別訳されることがなかった。「象」「徴」共に、文字としての意味をほぼ失っている。意味ない文字を並べただけ。日本語として定着している「シンボル」を、そのまま使うことが望ましい単語の一つ。

♪漢語離れと漢字熟語の役割♪

このように明治時代の翻訳語は、「日本語」の発展に大きく貢献した一方で、外国語との意味のギャップや、日本人でも分からない単語を生み出した。

福沢諭吉は、『文明論之概略』という本の中で、“civilization”の翻訳語にした「文明」について、一生懸命に説明しています。それは、ほとんどの人に馴染みがなかったことばを持ち出して来て、翻訳語にしたからです。それに加えて、中国古典で

●明治時代の翻訳語評価2（抜粋）●

翻訳語	英 語	評 価				別読み (別語)	原典	備 考
		同義性	機能性	浸透性	語感			
■古典からの借用語Ⅱ								
自由	freedom (liberty)	E	A	A	B	(解放)	中	「気まま」と重複
経済	economy	E	A	A	A		中	“economy (家政)”
文明	civilization	E	B	C	C		中	論議多い語
文化	culture	E	A	A	A		中	論議多い語
自然	nature	C	A	A	A	じねん	中	論議多い語
科学	science	B	A	A	A		中	「科学之学」を略した
主義	doctrine／～ism	E	A	B	C	(説)(～化)	中	訳語として最悪⚠
意識	consciousness	E	A	A	A	(良識)	仏	本文参照
快楽	pleasure／ecstasy	B	D	C	D	けらく	仏	仏語の意味喪失
■日本人の造語								
社会	society	E	B	B	B	(絆)	日	「会社」を反転⚠
個人	individual	E	A	A	B	(人格)	日	本文参照⚠
進化	evolution	E	C	B	B	(展開)	日	本文参照⚠
世紀	century	E	A	A	A		日	意味はともかく名訳○
時間	time／hour	A	A	A	A	(時刻)	日	本文参照◎
恋愛	love	C	A	A	A	(恋)(愛)	日	宗教観なし○
理想	idea	D	B	A	B	(夢)	日	“idea”を多義化
常識	common sense	E	C	A	D	(庶民感覚)	日	本文参照⚠
主観	subject	D	B	A	C	(きもち)	日	本来は「主テーマ」
客観	object	D	A	A	B		日	本来は「対象(物)」
象徴	symbol	E	D	B	C		日	本文参照⚠
機械	machine	A	A	A	A		日	本文参照◎
技術	technique	A	A	A	A	(技)	日	本文参照◎
情報	information	E	A	A	D	(お知らせ)	日	「お知らせ」より重い☂
【評価基準】 A: 極めて高い(極めて良い) B: 高い(良い) C: 普通 D: 低い(悪い) E: 極めて低い(極めて悪い) E: 問題語					【原典】 中: 中国文書(古典、辞書等) 仏: 仏典 日: 日本人の新造語			

ボクとワタシの ことば ばなし

使っていた「文明」とは、ちがう意味にしてしまいました。本を一冊書かなければ、「文明」を説明できなかったのです。

ことばは、時代によって変化して行きます。単語の意味も、変化するのはやむを得ないことです。でも、ボクたちはこの評価を通して、変化の傾向と漢字熟語の果たす役割に気づきました。

一方には、「精神」を「強い気持ち」と表現したり、「生命」を「いのち」、「理想」を「ゆめ」、「産業」を「なりわい」と置き換えるような傾向があります。いわゆる《漢語離れ》です。そんな中で、「人間」「世界」「歴史」「自然」「科学」のように、日本語の基本的要素は、漢字熟語が担い続けています。まだまだ漢字熟語は、重要な役割を持っているのです。

ボクとワタシの
ことば ばなし

続編もウキウキですよ！

第2話

- ・残されないことば
- ・「共通語」がやっぱ変だべさ
- ・「噂ことば」と「仕事ことば」

第3話

- ・「です」の物語
- ・ちょっと困った「新東京ことば」
- ・言語スイッチの切り替え
- ・アルファベットからのメッセージ

第4話

- ・世界の言語と日本語
- ・言語環境と言語生活
- ・文字の歴史

第5話

- ・心の風景と日本語
- ・これからの日本語

ボクとワタシの言語対談

- ・めちゃんこファンタジー

●参考させていただいた辞書や本です●

- ・ジャン・ジャック・ルソー著、小林善彦訳『言語起源論』（1989年、現代思潮社）
- ・新村出編『広辞苑 第二版補訂版』（昭和57年10月、岩波書店）
- ・中田祝夫編『新撰古語辞典 改訂新版』（昭和44年10月、小学館）
- ・『東北方言オノマトペ用例集—青森県・岩手県・宮城県・福島県—』（2012年、国立国語研究所）
- ・亀井孝、河野六郎、千野栄一編著『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』（1997年1月、三省堂）
- ・スーザン・ロメイン著、土田滋・高橋留美訳『社会のなかの言語』（1997年4月、三省堂）
- ・石塚雅英、柴田隆行編『哲学・思想翻訳語事典』（2013年5月、論創社）
- ・岩崎民平ほか監修『新英和中辞典 第4版』（1977年、研究社）
- ・田中毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』（1989年、旺文社）
- ・国松孝二編『独和大辞典』（1990年1月、小学館）
- ・桑名一博編『西和中辞典』（1987年2月、小学館）
- ・柳父章著『翻訳語成立事情』（1982年4月、岩波新書）
- ・福沢諭吉著『文明論之概略』（1986年1月、岩波文庫）

シンキング・バーズ新書

ボクとワタシの
ことば ばなし 第1話

2017年5月5日（初版）発行

著 者：シンキング・バーズ
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：シンキング・バーズ

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バーズに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。